

会報 八丈島三根会



八丈島と三根と私達！

三根会ホームページ

八丈島三根会



<http://mitsunekai.life.coocan.jp>



Vol.

5

2018 5.26

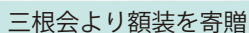
第 36 回八丈島三根会開催日発行

三根小学校昭和二十四年度卒業 藤巻伴英

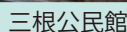
話は昭和五十六年（一九七六年）秋に遡ります。八丈島郷友会の元会長である奥山善雄氏が他界され、通夜の席で三根出身者が三名、顔を合わせました。植野重行氏（三根小学校昭和二十二年卒業）、故・金川寅彦氏（昭和二十四年度卒業）と私、藤巻伴英（昭和二十四年度卒業）です。その際、末吉、樫立では地区の活動が活発で、同窓会を定期的に開催しているという話を聞きました。そこで、三根でも是非同窓会を開きたいと、三名で活動を開始したのです。

出身者の多い三根で、できる限り大勢の方に参加していただくためにはどうすれば良いか、頭を捻りました。その結果、卒業年度ごとに一名ずつ幹事を決め、連絡や出欠の取りまとめをお願いすることになりました。そして三根会の初代会長は小沢民雄氏（昭和十一年度卒業）に、各年度の幹事をまとめる初代幹事長は金川寅彦氏にお願いしたのです。その後、各年度の幹事が集まり打合せをしました。当初は、知人に声をかけて十学年くらい集まったでしょう。しかし、打合せを重ねるたびに参加学年が増え、どんどん広がりを見せていったのです。そして昭和五十七年、第一回の三根会が開催されます。新宿の東京大飯店に三百五十名以上が集まり、大いに盛り上がりしました。その後、卒業生の片山氏のご紹介で帝国ホテルに会場を移し、さらに品川のパシフィックホテルへと会場は変わりました。その後、現在の東京プリンスホテルでの開催へと至ります。運営方法も発足当初と現在では異なります。かつては会計も、卒業年度単位で取りまとめていました。各年度幹事の負担も大きかったことでしょう。今の方法に変わったのはいつ頃だったでしょう

三根公民館 竣工おめでとうございます。



他、卓球のラケット 12 個を寄贈しました。



人物紹介 徳重医院「徳重 茂」

今回は医療機関の施設がまだ、少なかった昭和の時代に三根住民の医療に関わった徳重医院の徳重茂先生を紹介いたします。記事の内容はご子息の英一郎氏にご協力いただきました。

○ 略歴

大正七年六月二十八日 新潟市に、父 江端和作、母 イネの四男として生まれる。

昭和六年

徳重家と養子縁組、徳重 茂となる。

— 学歴

旧制新潟中、同新潟高、新潟医科大学を卒業。

昭和十七年九月

医師免許取得。

昭和十八年

海軍軍医中尉任官

昭和十九年

義妹 晶子と結婚。

昭和十九年

大尉任官 連合艦隊戦艦「金剛」に医務室長として乗艦。

— 終戦後、南方引き上げ船の医務官として引き上げ業務に従事する。

— その後、沼津、東京、新潟、福岡など各地の病院に勤務を繰り返す。

昭和二十五年六月 八丈島大賀郷村立直営診療所長として来島。

○ 大賀郷診療所時代

当時の診療所は、東里の都道に面した現在の「手塚金物店」の場所であり、道路面には石垣の土手で、左右に出入口があり、割合と大きな敷地の建物だった。当時は高田先生と云う先任の医師がおり、後に西田先生が加わった。看護婦さんが二人居り、後に三根へ引っ越すことに為るきっかけを作ることになる。

当時の大賀郷村長と診療に必要な薬剤の購入について要望を出しても購入して貰えず、大げんかの末、大賀郷村立直営診療所を退職することとなった。

○ 三根での事

前記の看護婦さんの一人に三根では是非来て欲しいと云う話があると紹介していただき、護神の天草倉庫前の借家で開業を始める。昭和二十七年九月の事である。

本業は外科であるが島という特殊な環境であり、ほぼ、何でも科と云う有様で内科、外科、産婦人科、時には歯科、獣医までも依頼があった。当時、中道に在った明治高校で教鞭を執ったり、保健所にも勤めたり、また、警察署の嘱託医や測候所の嘱託医も勤め、鳥島の測候所まで緊急手術に出かけたりもした。

また、底土の洞溜まりや東浦は戦後の砲弾や銃弾が海中投棄されてお

り浜自体が真っ赤な錆色を呈した危険な浜だったが、役場と掛け合ってこれを撤去、現在は島の海水浴場に整備されている。

昭和三十五年、現在の丘里に病院を建て、平成二十四年、九十四歳で医師を廃業するまで医療に係わった。

平成二十八年七月三十日 九十八歳一ヶ月で永眠。

○ 家庭人としての徳重茂

一言でいえばワンマン 外柔内剛の人。患者さんや周りの人には人当たりも良く、非常に温厚だが、家庭内では、頑固一徹、自己中心的で我儘！海軍軍人魂が最後まで抜けない。死ぬ迄家長、亭主、父親を貫きとおした人。

「這って黒豆」

つまり、自分が黒豆と言って仕舞った者が、這い出して、実は黒い虫で有ったとしても、間違えたことを認めず・・・これは黒豆だ！と言い張るほどの頑固モノ・・・という事。

そんな性格だったのが一番苦労したのが母であり、島で嫁いだ長女と隣に住んだ三男である・・・父が死ぬ迄被害を被ったのである。だから反面、敵を造ることも多かったように思う。

徳重 英一郎氏より

後記

徳重先生が海軍出身だとは驚きです。しかも戦艦「金剛」は太平洋戦争でガダルカナル島の戦いやフィリピンでのレイテ沖の連合艦隊の戦いで戦艦「大和」に随行して戦った戦艦です。その軍医長として活躍していたのですね。

戦後、高度成長期の頃だったのでしょうか、三根の街を徳重先生がトヨタの小さなスポーツカーで往診に出かけていたのをよく目にしていました。あの頃、若者であった私達は八丈島では見かけない憧れの「カッコイイスportsカー」でした。また、診察時にはいつも笑顔を絶やさず、温和なイメージが強いのですが、英一郎さんの話では、家庭ではまた、違う一面もあったようです。

医療機関の少ない離島の八丈島で島の医療に携わり、三根の町医者として長い間、私たちの身近で怪我や病気の診察を続けて私たちの健康を守ってくれた徳重先生、地域に大きく貢献してくれた先生でした。



八丈島の名前の由来

八丈島は古代から多くの島名で呼ばれていた。自然に由来する名であったり、人に由来するものであったり、島の産業に由来するものであったりした。現在呼ばれている八丈島の名前は中世になってから一般に用いられるようになったものである。

○沖島

この島が国地を去る遙か南東の海上にあり、伊豆諸島中もつとも奥にある島、すなわち沖にある島という意味から呼ばれたものと思われる。遠い昔、当時、島（八丈島）の存在することは知られていても思うように渡海することが出来なかった。この幻の島として多分に誇張され、あるいは架空の伝説と結びつけたりして喧伝され、当時の人々の好奇心を誘ったものらしい。

○八嶽島

南方海島誌に八丈島の名をやタケ島というところがある。その意味としてやは八のことであり、この島が伊豆諸島中八番目に開けた島であることを物語る。タケは嶽であるが字数が多くわずらわしくもある。タケの字を当ててタケと訓読させ、八丈と書き替えたものであらうと述べている。

また、八丈島の三原山は外輪山がいくつもの嶺に分かれあっても八岳が集まっているように見える事からこの名がついた。すなわち八丈とは三原山をもって代表するところの地形に由来する名称であるという説もある。

○綜島（イトシマ）

綜島の綜は糸であり、嶋は小島のことである。八丈島は古代から絹の産地として知られているので、この産地にちなんでつけられた名称と考えられる。

八丈実記の中で近藤富蔵は島には山しまと平しまとあるが、嶋は平しまのことで綜島の名称の時代は、八丈富士がまだ、涌出しない頃であらうと言っている。

○女護島

女人だけが住むという想像上の島。八丈島を古来女護島とした。この島の方言で長女をニヨコと呼ぶことから女護の文字にあて、八丈島を女人国とする説がある。

八丈島は古くから女人国伝説の島であったことを知ることができ。その名も女護島・女国・女子郷・女人島などと呼ばれていた。

○八郎島

八丈島の歴史において神代から人代への過渡期に出現して、数多の奇蹟を残した。鎮西八郎為朝に対する島人の敬慕の念から、女護島という旧名を改めて八郎島と呼ぶようになったという説がある。また、鎮西八郎為朝の八郎は島の方言で「ハッチョウ」と呼ぶ。このハッチョウ島が八丈島に転化したという説もある。さらに為朝が三根の根田原で大蛇を退治したがその時八つに切った大蛇の一つがそれぞれ一丈もあった。すなわち八丈もあった大蛇を退治したこと、八丈島の名が起ったという伝説もある。これらの所説はいずれも為朝を尊崇する島民感情の発露とみられる。

○八丈島

八丈島名の由来については、応時のこの島の年貢であり、かつ家庭経済を支えてきた唯一の産物である八丈絹があげられる。本居宣長の玉勝間に「八丈という島の名はかの絹よりぞ出づる昔」とある。八丈絹の名は、すでに平安京後期から南北朝中期に見え、各地から貢納される長さ八丈（絹織物の長さが八丈）の絹織物の名称で、八丈島特産の黄八丈（丹後織）の固有名詞ではなかった。八丈島の絹が貢納されるようになったのは、千四百九十八年（明応七年）神奈川の奥山宗林支配の頃からで、当時は献上品の形で貢納されていた。その後徳川時代に入ってから、今度は貢祖として正式に認められ、米穀に代わって年々多量の絹が江戸に送られ、大名・旗本・御殿女中の専用となり、おおいに八丈絹の名を高らしめた。こうしていつとはなく、八丈絹を産する島が八丈島となり、絹織物の代名詞であった八丈が、この島の固有名詞となったというのが妥当であらう。

――八丈島誌より

「八丈に帰省して」

三十六年度 太田 明代

八丈に帰省して早いもので、この一月で四年となる。

主人が定年となり、定年後の生活について話し合った結果、主人は自給自足の生活がしてみたいと、八丈での農業生活を選んだ。

もし主人が四季を通して八丈生活に耐えられ、農業を続けられる自信ができたなら、八丈に帰っても良いヨと

私は軽い気持ちで言った。農作業などしたこともない人なので、一年と持たないだろうと高をくくっていたら、以外にもしぶとかった。

私は東京でやるべきことが山積しており、「いつ帰るんだア」という主人を尻目に、二年も島流しをしてしまった。しかし、この間主人は必要に迫られ家事をこなせるようになってすっかり成長していた。そして益々八丈愛を募らせ、主人に手を差しのべてくれる人たちが皆、「我よかれ、人よかれ」ではなく「人よかれ、我よかれ」という素晴らしい生き方をしている人達で、そういう人達と生きていきたい、「八丈こそ人間が住む島だ」と八丈を終の住処と決めた。

妻の故郷に惚れ込み、こんなにも八丈を讃えてくれる主人と出会え、私は幸せ者だと思つづくと思う。若い時は窮屈で刺激のない毎日が耐えられず一日も早く島を出て、早く東京へ行きたいと願っていたが、年を重ねると見えてくるものがある。朝になると、障子の木漏れ日がゆらゆらとゆらめき、鳥のさえずりで目が覚める。東京の新青梅街道沿いに住み、排気ガスと車の騒音の中で生活していた私にとって、まさに天国のようだ。特に木の芽の新緑の輝き、澄み切った夜空の星々の煌めきが息をのむように美しく、まるで宇宙の中に包まれている「我」を感じる。そして時間に追われない、自然まかせの晴耕雨読の生活は生きているという実感がある。自然だけではない。八丈で出会う人はなぜか、飾らない自然体の心豊かな人たちばかりだ。こんな素晴らしい人たちに縁し、育ったんだと、感動さえ覚える。

ヤスデ、蚊、アリ、シロアリの猛襲など、頭を悩ませる事も多いが、自然と「共生」しているという、これらもすべてひっくるめて、これが八丈なんだと思う。

これから多くの人たちと出会い、絆を結んでいく中で、何色になるかわからないが、色褪せぬ黄八丈のように、これからは心豊かな日々を織りなしていきたい。聞くところによると、将来八丈は、消滅する島として名が挙がっているらしいが、このかけがえのない故郷を、私の故郷を、絶対に消滅させてなるものと心に誓う日々である。

2018年4月21日



三根公民館にて「もちまき」



美しい伝統を思い出し

三十八年卒 宮の平 宮木弘美（旧姓 槇野）

帰島した際に収集日なののでしょうか？落ち葉や草がきれいにまとめられ出されていることに気がきました。

いつ頃から始まったのでしょうか？記憶にあるのは子供の頃、お盆も近い夏の日、家族総出で大掃除を行いました。家だけでなく庭などの草取りもあり、大がかりな清掃でした。検査の日には子供心に「ドキドキ」したのを覚えています。

子供だけで行う道掃除もありました。石垣の草取りや裏道の清掃でした。

この様な掃除の習慣を子供の頃から学びました。

墓参りには毎年のように帰りますが、どの墓も掃除や草取りなどの手入れがいき届き、先祖を敬う心に頭が下がります。

子供の頃から培われた先人の教えに感謝したいと思います。美しい故郷を誇りに思います。



八丈島を想う

北山本子（旧姓 浅沼）

私は青春を八丈島で過ごし、高校を卒業して電電公社に就職して八丈島を後にしました。その後23歳で結婚、一男二女をもうけて現在は埼玉県越谷市に住んでいます。現在70歳になり、八丈島の思い出は両親のこと、青春を過ごした旧友のことです。私の実家・浅沼は農家です。里芋の収穫時期になると、母が里芋を入れた籠を背負い、私を連れて母の実家に。いなばのばあちゃんの家に行くと、美味しい果物、お菓子を頂けるのが楽しみ。今も心に残っています。

正月は新しい着物を着て、母の実家奥山文之助じいちゃんの所へ。その時撮った記念写真は懐かしい。そして幼稚園。入園式は大神宮近くの「天草倉庫」で行ったことを覚えています。そして11月3日に行われた三根小学校の運動会。桜の木の下で、家族と食べたお弁当の味。母が作ってくれた稲荷寿司、海苔巻の美味しかったこと。夕方からは青年団の相撲大会、続いてフォークダンスが懐かしい。

そして今では、遠く離れていても、永く会わずにいても、会えばその空白を一瞬で埋める友のいる三根会が私の宝物です。

三根会に感謝

加藤トヨ子（旧姓・田代）

私の最初の赴任先は三根小学校。母校でのスタートでした。担任は五年生。私の身長ほどの子供達です。日々大変でしたが、子供達と触れ合う中、可愛らしさが増し、地域や父母の大きな力に支えられながら、初めての卒業生を送ることができました。

三小には十五年もおりましたので、思い出も多く、その中でも運動会は今も心に強く残っています。地域、保護者、学校が一体となって盛り上がる島の運動会は最高にいいものだと思います。私たち職員も張り切り、マスゲーム等に取り組みました。先生方との打ち合わせは大変でしたが、子供達も泥んこになって練習し、その頑張りから成功した時の喜びは格別なものでありました。

それから時が経ち、生まれ育って二十年以上勤務した島を離れることになりました。島を離れてからは仕事に追われ忙しい日々でしたが、そんな中で三根会へ参加できることは、私にとって離れた島を再び繋いでくれる貴重な時間でした。そこには三根の方ばかり、その上思いがけない方との再会に八丈を思い出し、昔を懐かしみました。何回か出席しているうち、いつしか教え子との再会も。三根会の有難さ、素晴らしさを感じたものです。

最後に八丈にいたときは、子供達も含め、家族共々大変お世話になりました。今は山口におりますが、八丈は遠くに感じません。また、三根会で皆さんにお会い出来るのを楽しみにしております。

三根会の発起人小沢民雄氏が会の発展を「一滴の水から大河へ」と寄せていましたが、この会を立ち上げてくださった方々をはじめ、携わる多くの方々に感謝しております。そして私も同様に三根会がいつまでもいつまでも続くことを願っています。

平成三十年三月



趣味 高橋 朝見

誰でも趣味の一つや二つは持っていると思う。

私の場合は、定年退職を機に始めた油彩画である。再就職での休暇期間があるので約十年になる。画題は主に風景画である。現地に出かけて画くのはなかなか出来ないの、写真を見ながら画いている。

第36回八丈島三根会総会

- 12:00 三根会総会開催 (司会 幹事長 峯元 信博)
会長挨拶 会長 小宮山 肇
会計報告 会計 佐藤 千鶴代
会計監査報告 会計監事 須藤 保
新役委員紹介 会長より全役員
- 12:15 懇親会
来賓挨拶 八丈町町長 山下 奉也
来賓挨拶 八丈町議長 土屋 博
来賓挨拶 都議会議長 三宅 正彦
来賓挨拶 三根小学校校長 鈴木 勲
- 12:30 乾杯 名誉会長 高橋 朝見
<歓談>
- 13:40 懇親会 (司会 渡辺 稜子)
恩師紹介 会員有志
学年クラス紹介
- 14:20 懐かしのフォークダンス 有志全員
- 14:30 くじ引き大会
<歓談>
- 14:55 校歌斉唱 (全員) 会員有志
- 15:00 万歳三唱 副会長 太田 中
終了

三根小学校校歌

作詞 野口雨情
作曲 藤井清水

一、朝日はのほり輝やきて

八丈富士の峰高く

仰ぐわれらの三根校

仰ぐわれらの三根校

二、剛健不撓の精神に

流れも強き黒潮の

沖ゆくごとく進みなん

沖ゆくごとく進みなん

三、磯うつ浪の絶ゆるなく

朝に夕べにいそしみて

いざもろともに励みなん

いざもろともに励みなん

協力

・八丈町役場

・八丈町立三根小学校

・八丈町立富士中学校

表紙紹介
神湊港のカヌー揚場

編集：八丈島三根会事務局 電話 03-3330-7260 担当：峯元・鈴木 メールアドレス umi.nm.0925@gmail.com